

関西学院におけるキリスト教主義教育の展開

樋 口 進

RCCは、2013年度から新たなプロジェクトを立ち上げて活動を開始したが、本プロジェクトは、継続して行われている。ただし、研究員は以下のように多少代わった。コーディネイターは、RCC副長の樋口進（キリスト教と文化研究センター教授）が担当し、研究員として打樋啓史社会学部教授、村瀬義史総合政策学部専任講師、舟木讓経済学部教授、平林孝裕国際学部教授、嶺重 淑人間福祉学部教授、岩野祐介神学部准教授がメンバーである。

キリスト教と文化研究センター規程の第2条（目的）に、「センターは、キリスト教と人間・世界・文化・自然の諸問題に関する総合的な調査・研究を行うとともに、本学のキリスト教教育の内実化を図ることを目的とする。」とあるが、本プロジェクトは後半の部分を探求する役割がある。

この2年間の目標を以下のように掲げ、必要な研究・作業を行っていくこととした。①キリスト教教育の内実化の検討。②『建学の精神』の冊子の編集。③「キリスト教主義教育研究室」（キ教研）の歴史とその評価。④キリスト教主義教育研究室が出していた『キリスト教主義教育研究室年報』のPDF化。⑤キリスト教主義教育に関するシンポジウム。⑥チャペル活動のキリスト教教育における現代的意義と位置付け。⑦キリスト教科目のFDについての検討（宗教主事会の部会と協力して）。

本年度の第1回研究会は、5月31日（金）に行われた。神田健次神学部教授が「キリスト教主義教育研究室の歴史」というテーマで発表された。同氏は、詳細な資料に基づきながら、(1) キリスト教主義教育研究室の発端、(2) キリスト教主義

教育研究室の歴史と活動、(3) キリスト教主義教育研究室の将来計画検討委員会、(4) 大学の研究所構想検討委員会等について語られた。これによって、われわれは漠然と思い描いていた「キリスト教主義教育研究室」の歴史もある程度客観的に理解することができた。これは、1967年に、「キリスト教主義教育の理論とその実践の方法とを広く研究し」、学院の教育的使命の実現に寄与することを目的として設置され、教育部門研究会、歴史部門研究会、礼拝部門研究会、文化部門研究会をもうけて、活発な研究活動が行われてきた。しかし、1997年4月に大学の「キリスト教と文化研究センター」が発足し、この「研究室」は収束することになった。この「キリスト教主義教育研究室」をどう評価するかとか、「キリスト教と文化研究センター」との関係については、多少の見解の相違もあるであろうし、今後の課題であろう。

第2回研究会は、2013年12月5日（木）に行われた。講師は、立教池袋中学校・高等学校チャプレンで日本聖公会司祭の市原信太郎氏である。主題は「日本におけるキリスト教学校の礼拝の意味とは」というものであった。市原氏はまず、学校チャプレンとして、「学校」という場で働く位置づけについて述べられた。学校チャプレンは、百パーセント教員でもなく、カウンセラーでもなく、「場」に対する牧会者である、という自己定義を示された。

次に、学校と教会との関係について述べられた。学校礼拝は教会の礼拝よりも不完全であるが、学校礼拝は真の礼拝場所である教会への入口である。そして、学校礼拝が教会論的にどういう意味があるのかについて述べられた。そこで、洗礼によってキリストの体である教会に結び合わされることが教会という共同体の基礎であるが、洗礼は瞬間的な「水浴び」ではなく、プロセスである。そして、学校礼拝をそのプロセスの一部として理解することが可能であるのではないかと述べられた。

そこで、キリストの領域は世界と教会であるというオスカー・クルマンの「同心円」的理解を用い、日本の教会においては、はっきりと線を引くのではなく、大江健三郎の「あいまい (Ambiguous)」の概念を使い、日本における教会は「あいまい」であることをポジティブな価値として認めていくべきである、と述べら

れた。そして、普遍教会との交わりの内にあることが、すなわち教会であるが、学校礼拝が洗礼のプロセスの一部として理解することが可能であるのではないかと述べられた。

このプロジェクトの課題の一つは、ミッション展開推進委員会の「自校教育プログラムチーム」から協力要請の依頼を受けた『建学の精神考第4集』の編集である。創立125周年に当たる2014年度中に『第4集』を出すことを目標にし、現在「チャペル週報」などの資料を集めている段階である。

FDに関しては、大学宗教主事会の方で計画を立て、第1回研究会が7月5日（金）に行われた。村瀬義史総合政策学部宗教主事に、総合政策学部のキリスト教学の概要とチャペルの実際について報告してもらい、研修の時をもった。第2回研究会は10月4日（金）に行われ、山本俊正商学部宗教主事に、商学部のキリスト教学の概要とチャペルの実際について報告してもらい、研修の時をもった。